

警城時報

行發日三十二
印刷所 警城時報社
印刷所 警城時報社
印刷所 警城時報社
印刷所 警城時報社
印刷所 警城時報社
印刷所 警城時報社
印刷所 警城時報社
印刷所 警城時報社
印刷所 警城時報社
印刷所 警城時報社

急死した女の死因に疑い

火葬と葬儀の中止命令

夫婦喧嘩の絶へない家庭

平市田町五七野柴商佐藤唯一(四七)妻佐藤アキ(三七)は二十一日午後六時死亡したが、平署では死因に不審を抱き二十二日夜火葬にする筈であったが、二十三日午後二時の葬儀も延期せしめ、唯一の死因を平署に召喚取調を進めてゐる。

平市のラヂオ体操

八月一日から実施

平市では八月一日から二十日まで、全市民が国民心身鍛錬運動が実施されることになつたので、これが徹底を期すため、市内各小学校長、区長、青年團長等が、具体的には各団体で特殊性打合せを開くことになつたが、立脚して立案することになつた。

盛會を豫想される

中等校庭球大會

石城軟式協会の主催、縣体協及び市であるが、締切り二十五日以前後援の縣下中等校軟式庭球選に既に参加申込みの諸校次の如平權大會は、急よ來月四日の二、三向後期日迄には之れ以外の申請日に迫り各方面とも豫想されてゐる。

内科・小兒科

菅波醫院

院長 菅波 茂
入院臨時 四倉町本町
電話六十三番
◎見習看護婦入用

愛谷踏切

多年懸案であつた愛谷踏切好間村愛谷地内に於ける踏切二ヶ所を取除く縣道赤井停車場、川中子線の道路改修は、地主の承諾がまとまり既に一部着工中であるが、去る二十日縣土木部道路課から室井書記出張、好間村及び地元の愛谷島、安積、會津、喜多方各中の関係者と協議を遂げたが、右學、福島、喜多方、平各商業改修竣工は本年十二月頃になるであらう。

衣類を預けたまよ

遂に取りに来ぬ男
四倉海岸で溺死か

二十一日四倉海水浴場売店小名宮の作に奉祀せるに至る大平館に衣類を脱いで出かけた二年部民の信願で今の地に遷祀男の客が國防色の上衣、白シャツ、襟内襟に廣瀬、南は太平洋にツ、帽子其他を二十二日夕刻に溺死したのではないかと四倉署に届け出た。年齢、人相等一切不明である。

弘法大師祭

四倉新町如來寺境内にある弘法大師の祭典は、明二十四日午後四時より執行するが、本年は皇紀二千六百年祈願祭を行ふと。

諏訪神社昇格

小名宮町では同町の鎮守諏訪神社の縣社昇格運動に町民から金集集中であるが、同社は宇中島通北にあり、建御名方命を祀る。土御門天皇の建仁年間磐崎將監が信州諏訪郡から勧請

汽車に驚いた馬

幼児を轢き殺す

双葉郡野野町大字下北道東町の引いていた荷馬車の馬が驚いて荷馬車北郷郡野野町人及川不て走進した為附近に遊んで居た二歳(一)は昨二十二日午前九時五九番地農運課長内長男時頃久の瀕町大字末級地内鐵道患(三)が車輪に胸れ重傷を受け線路下のガードに差しかつた際、二十二日午前十一時頃死上り列車が頭の上を進行中及川亡した。

部落民の協力で

折松部落更生

石城郡入道野は郡内に於ての僻下農村對策強化を附議の筈であるが、同村大字折松部落は僻居中、なほ同部落は今迄事變以來中央位置の村役場から四へ更に一月一日、十五日の早朝その日里餘を距つ四回山に包まれる冷の仕事前に學民鎮守に集り皇軍軍地、自治政あがらず疲弊困の武運長久を祈願し其の都度一願の極にあるも三年程以前から名十錢づつ、貯金實行今や相當指導者の意に従つて木炭製造の共同作業及び主産物の蕪薯その他を共同販賣するもの等約四十戸を擧げて結束し各種集會に老幼男女一を欠かさずしかも定刻より一分間を遅れず集會するにまで部落民の氣持が改まり従つて農産物品評會等にも見事な成績を上げるに至つたが、外旅費自給、代議士星一氏の時來る二十四日常會を開いて戦時局認識に關する講演がある。

日進會で

一夜講習會

平市日進會では二十七日午後二時十五分平發赤井鐵道に至り常備で戦地に頭張つて居りますから御安心下さい、小生古河炭礦勤務の節は、また出征の際には色々と御世話様に相成り戦地へ参りましてまでの御厚志まで。

長谷川翁逝く

四倉町本町新道通り海産物商長谷川卯之吉翁は永らく病氣の處昨二十二日死去した、氏は現町會議員長谷川西次郎氏の實兄である。氏の遺志に依り嗣子齊氏は百圓を左の如く寄附した。

中支から

須藤良平君通信
拜啓 御家御一同様には其の後御變りありませんが、降つて須藤も相變らず益々元氣で戦地に頭張つて居りますから御安心下さい、小生古河炭礦勤務の節は、また出征の際には色々と御世話様に相成り戦地へ参りましてまでの御厚志まで。

募集廣告

配送御希望の少年を募る
御希望の方は御來談下さい
警城時報社
四倉支局

新しき心構へ

(中) 増田 次郎

即ち古い因襲と傳統とに集つた生活の一大革新運動を強行したと聞いた。こんなことを考へるとき、果して我が國にどれだけの生活革新運動が行はれてきたか、決して他山の石どころではない、我々に追つて來る問題だ。眞に憂慮に堪へない。節約は、大いにならなければならない。然し從來の生活に大なる革新を加へないならば、節約すればするほどどこかに大なる穴があく様

ことに感激いたして居ります。中支の山奥に於て雨とより來る彈丸のなかにドロ水をすくひ草をかんて雨の中に寝ながら山を越え谷をくぐり河を渡り行けども行けども廣い支那の土地を何百里と行軍した。突撃し進撃しつゝ支那兵を討伐相當多くの戦ひを経て居ります。その間惜しき戦友を失ひたが私はまだ微傷に過ぎず死線を越える毎に勇氣を倍加し戦ひつゞけて居ります。これ偏に皆様が神佛をかけての武運長久祈願による賜ものと感謝いたし居ります。今後は更に々々頑張り皆々様の御期待に副ふ覚悟であります。ば御見捨てなく御指導御鞭撻下さるやう切に御願ひ致します。この御便りも岡さんの萬年筆、戦地の通信連絡みな當さんの萬年筆とシャープで當りて居ります。では皆さん御体を御大切にまた後便にて、さようなら

のであるが、新は同一の水面に於て行はれるものでは決してない。それはその水面を乗り越えたと高水準の面に於て新しい余韻と稱想の下に行はれるものである。それは決して古い秩序を單に破壊するばかりではない。それ等の古い秩序を更に乗り越えてなされるものである。否定のみでは大なる革新は決してなされない。肯定による飛躍である。既に述べた如く、われわれが現在の生活に不自由を感じてゐるのは生活それ自身が飛躍されてゐないからである。壊しては建て、建ては壊して一體何が出来るか。

それは賽の河原なればいざ知らず、臨時も進展して止まない現實の世相にはその様なことでは直ちに前進する第一線から落伍しなければならぬ。このことはわれわれの日常生活に於てばかりでなく、政治に於ても外交に於ても同様である。例へば、例へば現在の日本人が口癖の様にしてゐる東洋の新秩序建設にしてもさうである。それに決して舊い秩序を壊してその後に新秩序を作りあげるのである。新秩序を壊さなければならぬ。古の秩序を壊さなければならぬ。換言すればより高い

段階に立つことである。この更に高い段階にたつてこそ新しい秩序の意味が明瞭にされるわけである。乗越えるといふことは決して否定のみではない。一段高き乗り越える所である。革新といふことはさうでなければ決して正しく理解されてゐるとはいへない。ともすれば眼前の何か革新運動と同じ所を足踏みばかりして飛躍した高層階に立つて構造を新にし、金剛を新し、そしていふまでもなく、新の海に思ふのである。

